

【書評】

石川達夫

『チェコ・ゴシックの輝き—ペストの闇から生まれた中世の光』

—LESK ČESKÉ GOTIKY—
(成文社、2021年、190頁)

藤田教子

いつ終わるとも知れない疫病のパンデミックの最中にあり、我々の価値観は根底から覆されてしまった。先の見えない日々の中、過去にパンデミックを体験した人々はどうのように希望の光を見出してきたのか。本書には「死と不幸を免れない人間には光と慰めが必要だ」という石川氏の想念が込められており、我々はその「光と慰め」を芸術作品に求めた先人の試みを追体験することができる。

荘厳な聖ヴィート大聖堂のステンドグラスの表紙をめくると一種グロテスクな美しさをたたえる《クシヴァークのピエタ》が読者の目に飛び込む。《クシヴァークのピエタ》では聖衣の血痕は大きくその数も多く目立ち、この情景のむごたらしさを強調している。この《クシヴァークのピエタ》がチェコで生まれた背景を探ってゆく論の展開は推理小説を読み進むような臨場感を伴う。ゴシックの建築様式の構造やデザインの詳細にわたる解説を伴う広範囲にわたる調査記録は、神聖ローマ帝国の栄光とともに広がっていったチェコ・ゴシック様式の影響範囲の広さを如実に表している。

序章「闇と光のせめぎ合い」では中世のペストの闇とその闇を凌駕すべく救済の光としてゴシック様式が生じた経緯が説明される。ゴシック様式はフランスで誕生したが、幼少期をフランスで過ごし、国際的な感覚を身につけていたカレル四世の統治下、ブラハ及びチェコはゴシック文化の拠点となった。ヤン・フスの宗教改革もイギリスのジョン・ウィクリフからの影響を受けたとされており、チェコ・ゴシック文化は国際交流の活性化を背景に中世チェコに繁栄をもたらした。国境を超え異国の文化を重要視する傾向からはヤン・アーモス・コメンスキーのような偉人も生み出された。チェコ・ゴシック様式は国際交流の恩恵を受けたのみならず、文化の発信源としての役割をも果たした。英語訳聖書がなかった時代、イングランド王リチャード二世に嫁いだアンナ（アン）がチェコから持参したラテン語・ドイツ語・チェコ語訳抄録福音書がジョン・ウィクリフの英語訳聖書にも影響を与えたとされていることは興味深い。チェコの領域は11世紀から神聖ローマ帝国の一部となり、カレル四世とその息子のヴァーツラフ四世の時代に数多くのゴシック様式のキリスト教及び世俗の建築、彫刻、絵画、

文学作品などがつくられたが、この時代に流行したペストの影響もあり、人々は「死」を身近な存在として認識し、「死」が具象的存在として表現される芸術作品も数多く作られた。チェコの聖職者を始め、カレル四世の肉親もペストの犠牲者となることを免れなかった。《クシヴァークのピエタ》を含め、チェコ・ゴシック様式の作品も「死」が日常的に存在する闇の中で救いを求める心から生まれたものであろうと指摘している。

第一章「チェコのゴシック教会堂とヴォールトのデザイン」では、ゴシック様式の遺産がプラハとチェコのみならず、チェコの東側のモラヴィア地方、かつてチェコ王国の一部であった現在のポーランドのシレジア地方など広範囲にわたって見いだされることが特筆される。ゴシック的精神の本質の一つである変化、多様性はその建築様式にも現われ、尖頭アーチの比率や束ね柱の束ね方及びその比率により、何百万もの変種を生じさせることとなった。「昇高性」「仰高性」はゴシック建築の大きな特徴であり、内部から見上げた天井は単に構造的な役割のみならず、装飾的・美的機能をも兼ね備えている。チェコ・ゴシック建築の特徴的な要素であるさまざまなヴォールトのデザインを、チェコ各地において現地調査することによりチェコ・ゴシックの多様性がそれぞれの個性を伴いどのように発展し、広がって行ったのか、詳細にわたり紹介されている。神聖ローマ帝国の広大な領土を建築家、芸術家、職人たちは自由に渡り歩き、彼らの個性的な才能がチェコの王や貴族たちに支援されたことにより、チェコ・ゴシック建築はそれぞれの独自性を保ちながら多様性を伴い広い領域に影響を与えることに成功した。

第二章「カレル四世とチェコ・ゴシックの遺産」では、まずプラハを中心にチェコをチェコ・ゴシックの遺産の宝庫へと導いたカレル四世の人生、功績、人柄、時代背景が紹介される。ルクセンブルク家のカレル四世はチェコ王と神聖ローマ皇帝を兼ね、プラハを神聖ローマ帝国の首都に定め、チェコ王国の黄金時代を築いた。幼少期をフランスの宮廷で過ごし、多言語を習得し、高度な教養を身につけていたので芸術にも造詣が深く、さらに信心深いキリスト教徒であったカレル四世は教会や聖職者を積極的に援助した。フランスの影響を受け、熱心な聖遺物崇敬者でもあり、プラハに多くの聖遺物を収集した。カレル四世は熱心な聖母マリア崇敬者であり、収集した聖遺物に血痕聖衣（磔刑死したイエスの血が付いた聖母マリアの衣）が含まれていたこと、さらにフランス王室の影響を受け聖遺物を公開する聖遺物展覧会行事をプラハで開催したことは、チェコ・ゴシック芸術に血痕聖衣のモチーフが導入されることへ繋がったとされる。「平和の大公」と称されたカレル四世は協定、婚姻政策に基づく外交を戦よりも優先していた。チェコが経済的にも文化的にも発展した背景にはこのようなカレル四世の平和政策があり、「カレルの平和」の時代、カレル四世は廃墟と化していたプラハ城を再建した他、プラハ大司教区、聖ヴィート大聖堂、プラハ大学、プラハ

新市街、プラハ橋（カレル橋）やカルルシュテイン城を設立、建設した。この章ではそれらの偉業に関して詳細が語られる。カレル四世は自身の威信を示すべく芸術を積極的に利用し、カレル四世の趣向から「皇帝様式」とも呼ばれる、量感に富む人物像を中心とする記念碑的な様式が形成された。1360年頃チェコに定着した「皇帝様式」は神聖ローマ帝国や同盟者たちの領土へと広まり、1370年代末以降ヨーロッパ諸国で「国際ゴシック様式」を生じさせ、やがてチェコの地においてカレル四世の息子のヴァーツラフ四世の時代に「美麗様式」となった。詩人フランチェスコ・ペトラルカが書簡に記したカレル四世及び周辺の卓越した人々の人文主義に基づく優雅な振舞いに関する文言はカレル四世本人のみならず、その周辺にも優れた文化人、芸術家たちが集結していたことを証明している。

第三章「チェコ・ゴシックの華、『美麗様式』の誕生と受難」では、カレル四世の息子のヴァーツラフ四世の時代に話題が移る。絵画において初期の「美麗様式」に影響を与えたのは、南ボヘミア地方トシェボニを支配し、チェコ・ゴシック様式の拡散に大いに貢献したチェコの大貴族ロジウムベルク家の祭壇画を描いたトシェボニの祭壇のマイスターであった。作品の特徴としては聖人・聖女たちの繊細な輪郭、半ば非物質化し、霊化して宙に浮きかかっているような軽やかさなどが挙げられる。「美麗様式」は写本の装飾にも影響を与え、装飾写本『ヴァーツラフ四世の聖書』が有名だが、この写本がドイツ語の翻訳写本に装飾されているところから、聖書をラテン語から俗語に訳すことを異端行為と断じたカレル四世と異なり、ヴァーツラフ四世が時勢の流れに乗じて、俗語訳の聖書を容認していた証拠ともなっている。カレル四世の死後、チェコでは再びペストが猛威を振るい、神聖ローマ皇帝であったヴァーツラフ四世は教会大分裂を平和裏に解決することが出来ず、幽閉された。さらにヤン・フスの改革派（フス派）とカトリック派の対立も激化した。失脚したヴァーツラフ四世の代わりに神聖ローマ皇帝になったジギスムント（ジクムント）が開催したコンスタンツ公会議でヤン・フスは異端宣告され火刑に処された。ヴァーツラフ四世の時代に生まれた「美麗様式」はこのような不穏で不安な情勢の中で育まれた。「国際ゴシック様式」のチェコ的分枝として位置づけられている「美麗様式」の重要なテーマの一つは聖母像（聖母子像）、「ピエタ」であった。中世の「ピエタ」には「垂直型」「水平型」そして対角線型ないし斜め型である「美麗様式型」があり、本書では数多くの例を挙げ中世の「ピエタ」の型が詳細に説明されている。チェコの「美麗様式」の「ピエタ」は「美しいピエタ」と称され、プラハで制作された像がヨーロッパ各地へと運ばれていたが、その大きな特徴は聖母が若き美少女として造形されていることと、その聖母の衣が血にまみれ、血痕聖衣のモチーフが明確に見られることであるという。初代プラハ大司教は聖母マリア崇敬を発展させたが、第三代プラハ大司教イェンシュテインのヤンは、さらに聖処女と呼ばれることもある聖母マリアを永遠に若く美しい少女、

すなわち乙女として造形すべきであると強調していた。そして先述の通り、聖母マリアの血痕聖衣はカレル四世により公開されていた。「血痕聖衣の聖母」と「美しい聖母」の交差——血痕聖衣と美少女という二つの要素の交差——の上に冒頭の写真で紹介されていたチェコ特有の「血痕聖衣の若く美しい聖母マリア」である《クシヴァークのピエタ》が誕生したとの石川氏の指摘には説得力がある。第三章ではチェコの宗教改革とゴシック美術の関りも論じられる。チェコではコンラート・ヴァルトハウゼル、ヤノフのマチェイ、アルフォンス・ムハの「スラヴ叙事詩」にも描かれているクロムニェジーシュのヤン・ミリーチなど、すでにヤン・フス以前にもチェコ語で改革的思想を唱えていた説教師たちが存在した。彼らの「美麗様式」に対する態度には温度差があるが、美化された聖母や聖女たちが本来伝えるべきキリストの受難の残酷な真実よりも、その美しさによって見る者に不適切な想いを抱かせ、むしろ罪を誘発する可能性があるという警告するヤン・フスの言説は、美化された聖母や聖女たちの誘惑的なまでの美しさを本能的に認めていたことをも示している。

第四章「チェコ・ゴシックの文学と音楽」では、多言語状況下におけるチェコ語文学及びチェコの音楽が紹介される。中世のチェコ、特にプラハの文化的特徴として挙げられるのは複数の言語や文化圏の重なり、すなわち複数の言語、文化が常に混在し、融合と葛藤を繰り返し、競合している状況である。民衆の多くは読み書きもできない状況にあったが、カレル四世やヴァーツラフ四世など少数の教養ある上層階級は通例ポリグロットであり、主にチェコ系、ドイツ系、ユダヤ系住民が共存していたため多言語状況が常態であった。そのため、チェコという土地で書かれた領域的なチェコ文学には、古教会スラヴ語文学、ラテン語文学、ドイツ語文学、チェコ語文学、ヘブライ語文学など、異なる言語で書かれたさまざまな文学があった。チェコ語で書かれた文学は1300年頃に始まったが、当初は他のヨーロッパの諸民族語文学と同様、文語であったラテン語に堪能な者たちがラテン語文学の素養を生かし俗語・地域語・民族語で書いたものであり、それらの作品は別の言語で書かれていても、互いに共通性や継続性を持ち、先行作品に対する応答や対抗関係が見られた。チェコの民族王朝ブシェミスル家の王たちもミンネゼンガー（宮廷歌人）から影響を受け、ドイツ語の詩創作が貴族の宮廷にも広がり、チェコでドイツ語詩の黄金時代が開花した時期もあったが、のちに政治的、経済的、文化的理由から勢力を増してきたドイツ人に対する反発がチェコの人々に民族の自己表象としての本格的なチェコ語文学を書かせることになり、それらは当然反ドイツ的な要素を含むこととなった。チェコ語で書かれた文学は人々の強い願いを反映し、虚構の物語をも含みつつチェコとスラヴの伝統をことさらに強調し、それをさまざまな表象によって顕示しようとした。おそらくはこの時期にチェコの最初の聖人にして第一の守護聖人であり、永遠の統治者としての聖ヴァーツラフのイメージが定着したものと推定される。このイメージは文学のみならず美術にも浸透

し、チェコ各地に聖ヴァーツラフ像が広まることとなった。聖ヴァーツラフに関してはカレル四世も聖ヴァーツラフ伝をラテン語で執筆していた。すでに旧約聖書の族長たちから自身に至るまでの連作絵画をカルルシュテイン城に描かせていたカレル四世は文学においても同様のことを試み、チェコの歴史を、自身の存在を「世界の」歴史の中に組み込むべく、新たな年代記を書かせた。この試みもまた国王・皇帝や王国・帝国の威信を高めるための「皇帝様式」の文学作品であったといえよう。また、中世には人間以外のものを擬人化して論争させる「論争」のジャンルがあり、中世チェコ・ドイツ語文学の傑作として知られる『ボヘミアの農夫』では「死」が、チェコ語で書かれた『織匠（恋人と不幸との争い）』では「不幸」が、それぞれ擬人化され、前者は妻を亡くした農夫と、後者は恋人に去られた男と論争する内容となっている。「論争」のジャンルはまた「死」を身近に感じた人々の「慰め」のジャンルでもあった。『織匠』は高度な哲学や神学といった「高文化」の要素をチェコ語文学に取り入れたものであったが、民衆的な要素をチェコ語文学に取り入れたチェコ・ゴシック演劇の『偽医者』では聖なる言葉であるラテン語と俗語・地域語・民族語であったチェコ語やドイツ語との混在、言語的な聖俗混交がみられるという。すでにカレル四世の時代から生じていた宗教改革的、異端的運動の影響を受け、説教や宗教的な著述で使用される言語にチェコ語が加えられていたが、この運動は宗教のみならず、言語・文学・文化一般をも変えていったという。散文を中心に、チェコ語で宗教的論説や説話集が書かれ、韻文ではチェコ語で聖歌がつけられた。ゴシック時代のチェコでも単旋律のグレゴリオ聖歌がラテン語で歌われることが一般的であったが、チェコ語で歌われる聖歌もあった。音楽においても文学と同様、ラテン語と俗語の混在、神聖なるものと世俗的なものの混在がみられた。多言語状況にあったチェコのゴシック時代、宗教改革的運動の推進者たちはラテン語のわからない民衆に寄り添うべく、チェコ語でさまざまな芸術活動をするようになり、チェコの文学と音楽の俗語・地域語・民族語化が進展した。

終章「光を求める闇」では、フランスのゴシック様式の誕生に際し、光への志向が意識されていたことが指摘される。「神は光なり」という聖書の文言を偽ディオニュシオスは「被造物が神に類似する程度に応じて神の光を分有しており、神の非物質的な光を内包している」と解釈した。そしてこの解釈がチェコの「美しい聖母」の誕生に影響を与えていた可能性もあるという。それは「光の美学」ともいべきものであり、ゴシック大聖堂が「光の美学」に基づき神の世界をマクロに形象化したものであるとするならば、装飾写本はミクロに形象化したものであり、光は常に意識されていた。チェコ・ゴシック文化は外来のものとチェコのもの、国際性と民族性との交差の上に生じたが、その状況は神聖ローマ皇帝・チェコ王カレル四世の出自や、存在そのものを反映したものでもあった。ゴシック様式はやがて後のバロックにも影響を与え、チェコ・バロック様式とも融合してゆく。

複雑な時代背景、政治的情勢を含む内容であるが、さまざまな読者を想定した親切的な配慮が本書ではいたるところになされている。馴染みのない専門用語には、数多くの図版や写真が添えられ、複雑なカレル四世の親戚関係も略図で提示されるのみならず、その関係性がその度ごとに繰り返し説明される。付表として「カレルの戴冠式一覧」、「プラハの主なゴシック遺産」、「プラハ以外の主なゴシック遺産」、「南ボヘミア地方のゴシック宗教施設一覧」が提示され、さらに巻末ではプラハ・ゴシックの遺産を探访する補章の入手方法も紹介されている。数多くの美しい写真を伴う広範囲にわたる調査を基盤にした、緻密な研究には圧倒される。チェコ・ゴシック文化に関する膨大な情報を日本語で得ることが出来る本書は、この領域を研究している者にとってなによりもありがたい存在である。ゴシック様式においては、キリスト教の建築物が圧倒的に多いが、本書ではキリスト教関連施設のみならず、巻末の表ではゴシック様式のシナゴグも言及されている。少し補足するならば、そこで紹介された旧新シナゴグは聖アネシュカ修道院の側で働いていた王の石工組合職人たちによる建築を許された経緯を持っている。ユダヤ系の住民は当時、キリスト教徒と区別され、住居も含め王の所有財産として存在していたが、カレル四世に資金提供することで、優遇されたユダヤ教徒もいた。本書はゴシックのキリスト教的なものに焦点を当てて論じられているので、当然ではあるがユダヤ系住民に関してはほとんど言及されていない。微かな違和感を覚えたのは、プラハの歴史に陰ながら影響を与えていたユダヤコミュニティの歴史にも著者が関心を抱いてきたからにほかならない。不穏なヴァーツラフ四世の時代、ペストの責任を問われ生じた凄惨な大虐殺は後世に語り継がれているが、襲撃時にプラハのユダヤ人が救いを求め逃げ込んだのもコミュニティの中心にあった旧新シナゴグであった。後に栄華を極めたユダヤ人の富豪たちもゴシック様式やネオ・ゴシック様式を取り入れたシナゴグや建築物を次々と建てた。本書で指摘されたように、チェコ・ゴシック文化はさまざまな民族のさまざまな歴史を背景に帝都プラハを中心に栄え、ペストの闇の時代も後の時代もそこに住まう人々に「光と慰め」を与え続けたといえよう。